

2025年11月2日 第二礼拝

説教題『しかし、教会では』使徒言行録12章1～5節

主任牧師 加藤 誠

「こうしてペトロは牢に捕えられていたが、しかし、教会では彼のためにたゆまず熱い祈りが神にささげられていた。」(使徒言行録12:5 私訳)

『祈りのちから』という映画があります。高齢の女性クララが持ち家を売ろうと不動産屋のエリザベスを呼びます。エリザベスの家庭は一見豊かで理想的に見えましたが、夫との間にすれ違いの問題を抱えていました。その問題に気づいたクララは、彼女を自室のウォーキングクローゼットに案内し、ここは人生を幸せにおくるための祈りの部屋であり、神に祈るように勧めます。最初は渋々だったエリザベスでしたが、祈り続けることで彼女の周りに不思議なことが起こっていき、家族のすれ違いと隙間に、思いやりと正直さ、信頼が注がれていく…という映画です。

祈りは神さまとつながる糸です。大井教会の教会学校で昔、教師として立たれた方がクラスの若い人たちに「まず神さまとつながりなさい。細い糸でもつながりなさい。そうしたら隣の人と手をつなぐことができる」と語られた話を聞きました。多くの人は祈りという糸は細くて何の力もないように見える。祈りに時間を費やすよりも、体を動かしたり頭を使ったほうがずっと生産的に思える。クリスチャンでも祈るために時間を取り分けることは難しい。ついつい他のことを優先してしまいがち。「今は忙しいから、時間ができたら祈ろう」と思っている間は祈ることはできません。忙しさに追われて心がせわしない時ほど、実は祈りを必要としているときです。

初代教会の人々は祈りを大切にしました。というより、彼らは社会的に小さく弱い力しか持っていなかったのも、祈るほか何もできなかったという方が正しいかもしれません。「弱い時にこそ強い」「弱い時ほど神の恵みを知る」という言葉は真理です。強い時、私たちは自分の力を頼りにして祈りを軽視するけれど、弱い時は祈るしかできない。だから「弱い時にこそ強い」。初代教会の人たちは弱かったゆえに祈らざるを得ず、だからこそ神さまの恵みの力を体験していく教会とされたのです。

今朝の使徒12章で、ヘロデ王は教会のリーダーたちを次々に捕えていきます。ヨハネの兄弟ヤコブを処刑したことがユダヤ人に喜ばれるのを見たヘロデ王は、ペトロを捕えます。除酵祭の時期とありますから、ちょうど主イエスが捕えられた時期と重なります。牢屋の鎖につながれたペトロは、主イエスの十字架を思い起こし、覚悟をしたことでしょう。5節「こうしてペトロは牢に捕えられていたが、しかし、教会では彼のためにたゆまず熱い祈りが神にささげられていた」(私訳)。日本語聖書では省略されていますが、原文には「ペトロは牢に捕えられていた」の後に「しかし」という言葉が記されています。横暴なヘロデ王に前に何もできない小さな教会。教会といっても自

前の礼拝堂があるわけではなく、信徒の家に集まっては主イエスの恵みを想起し、パンと杯を分かち、主の慰めと励ましを受け取っていた小さな群れです。絶対的な権力を持つヘロデ王の前には何の抵抗もできない力弱い教会でした。「しかし」一つだけ教会にできることがありました。それは「祈ること」です。榎本保郎先生が『新約聖書一日一章』でこう書かれています。「初代教会はこの世的にはまったく弱かった。しかし、望み得ないときにもなお、望みつつ信じる強さを持っていた」。「弱い時にこそ強い」という、祈りを通して神さまとつながる恵みの強さを、初代教会の人々は体験していたのです。

6 節以降に、牢の中のペトロが天使によって救出される奇跡が起こります。ペトロ自身さえ幻を見ているように思えて、現実とは思えなかった不思議な出来事です。教会の人たちが集まっている家の門をペトロが叩いた際、応対した女中が喜びのあまり門を開けず家に駆けこんで報告すると、人々は「あなたは気が変になってしまった」とか「ペトロを守る天使を見ているのだろう」と、女中の言うことを信じませんでした。面白いですね。彼らはペトロの救出を熱心にたゆまず祈っていたはずなのに、本心では信じていなかったのでしょうか。人間の祈り、信仰というものの不完全さを示されます。けれども、神さまは私たちの不完全さを超えて御業を見せられる方です。100%信じ切れていない、不信仰の混じった祈りだとしても、教会はたゆまず熱心に祈っていた。だからこそ、ペトロの奇跡を目の当たりにし、人間の思いをはるかに超える神さまの御業を経験することができたのでした。不完全で、信じ切れていない、細い糸であったとしても、神さまにつながる祈りを大切にしていきたいのです。

エフェソの信徒への手紙 6 章は私たちにこう勧めています。「主により頼み、その偉大な力によって強くなりなさい。…神の武具を身につけなさい。…救いを兜としてかぶり、霊の剣、すなわち神の言葉を取りなさい。どのような時にも、霊に助けられて祈り、願い求め…絶えず目を覚まして根気よく祈り続けなさい。」と。私たち自身の力ではなく、霊の力を願い求めていく。ここに教会の命の秘密があります。

ヘロデ王は、キリスト教徒迫害を自分の人気回復と権力維持に好都合と考えて利用しました。権力者は、自分の名誉・評価のためにどんなことも利用する。それが良いか悪いかではない。そのように横暴で我が物顔にふるまう権力者の前で、教会は実に無力に見えます。けれどもマザー・テレサは、ガザの検問所で「武器は持っていませんね？」と兵士に問われた際、「祈りという武器は持っていますけれどね」と笑顔でユーモアたっぷりに答えたそうです。何も持ちえない時にも「祈り」という「恵みの賜物」を与えられている。その「恵みの賜物」を私たちはどこまで真剣に、また大切に用いているのでしょうか。「しかし、教会では」。「恵みの賜物」としての「祈り」を土の中に埋めてしまうことなく、使い切っていく教会でありたいと願います。